

「あなたに仕える神」

マルコによる福音書 第10章 35節～45節

説教 本庄侑子伝道師

ガリラヤで人々の病を癒し、悪霊を追い出しておられた主イエスは、「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く」(マルコによる福音書 第10章34節)と宣言なさいました。

このとき、人々の主イエスに対する期待は積み上がっていました。このお方こそ約束されている救い主に違いない、と期待していたのです。当時、ユダヤ人たちはローマ帝国に支配されていました。救い主が与えられる、という神様からの約束を握りしめていた彼らは、救い主が現れさえすれば、ローマ帝国から解放されて、自由と繁栄の日々がやってくると思っていました。

そんな中、ヤコブとヨハネがこのようなことを願ひ出ます。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」(37節)ローマ帝国を打ち負かし、王として君臨する時、わたしたちを重要なポストにつけてください、と願ったのです。

主イエスはおっしゃいました。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受ける事ができるか。」(38節)二人は「できます。」(39節)と断言します。ローマ帝国が敗北し、自分が報われるためなら、何だって耐えられる。そのような思いでいっぱいだったのでしょう。そのとき、他の弟子たちは「腹を立て始め」(41節)ました。弟子たち全員がヤコブやヨハネと同じ思いでした。その間には、互いへの疑いと敵意が生まれていました。

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を捧げるために来たのである。」(45節)主イエスは、ローマ帝国を打ち負かすことでは本当の問題は解決しないことを見抜いておられました。ローマ帝国から解放されさえすれば満足を得るような、私たち自身の罪が問題だからです。主イエスはたったお一人で十字架に向かわれました。十字架から降りることもできたお方が、十字架の上に留まり、絶望の叫びを叫んで、死んでくださいました。王として君臨するためではなく、私たちを罪から解放するために、ご自身の命を身代金として支払い、苦しみもたえながら死ぬために来てくださったのです。

「しかし、あなたがたの間では、そうではな

い。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になりなさい。いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」(43節～44節)これは、この世界から出てくる言葉ではありません。十字架にかけられるために生きた、救い主イエス・キリストでしか語れない言葉、父なる神様の願いです。主イエスが、父なる神様との関係を回復させ、神様との交わりの中で生きる道を切り開いてくださいました。さらには、人との関係をも回復させてくださいます。神様の願いを聞いて、仕える僕として生きる私たちを通して、人との交わりを回復させてくださいます。

主イエスはおっしゃいました。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。」(39節)私たちは、気楽なガリラヤではなく、救い主イエス・キリストを十字架につけるほどの罪が渦巻くエルサレムの中で、仕える僕(しもべ)の姿をとることになります。しかし、私たちが受けるべき罪の代償、永遠の滅びという杯を、主イエスが代わりに飲んでくださいました。私たちが受けるべき十字架の死という洗礼を、主イエスが代わりに受けてくださいました。何より、今や教会において、罪の赦しの洗礼を受け、そのために流された主イエスの命を繰り返し味わい知る、聖餐の恵みに入れられているのです。

私たちは、自分の努力では仕える僕になれません。しかし、私たちが失敗しても、教会は立ち続けます。洗礼を受け、聖霊が注がれ、教会に加えられ、神様の願いを聞き続ける中で、主が私たちを変えてくださいます。私たちを、罪による滅びではなく、父なる神様に結びつけて命を与える主イエスの霊が、神様の願いを行う者としてくださいます。私たちは主の霊が満ちる教会の礼拝において、激しい力に触られています。激しく握りしめられています。

「皆に仕える者になり」「すべての人の僕になりなさい。」私たちは、それぞれのエルサレムに入っていくことになるでしょう。お語りになった主イエスご自身が、私たちを握りしめて仕える僕とし、人との交わりを回復させてくださいます。主イエスはそのために来てくださったのです。十字架にかかってくくださったのです。

(記 本庄侑子)